

# Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.18 No.4 April 2017

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
「神が抱きしめ…」  
／高見宇造…………… 1
- ・ 天理教教理史断章 (115)  
勢山文書⑥「おさしづ」の写し翻刻  
／安井幹夫…………… 2
- ・ 『教祖伝』探究 (34)  
秀司様③  
／深谷忠一…………… 3
- ・ 「おふでさき」天理言語学試論～「こと」  
の世界観への未来像～ (36)  
第5章 高橋和巳と『邪宗門』②  
／井上昭夫…………… 4
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (20)  
「引き出し」としての「くろぐつな」②  
／佐藤孝則…………… 5
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道  
の様相 (4)  
戦前のアメリカ伝道と日系移民社会③  
／尾上貴行…………… 6
- ・ 「おふでさき」の標石的用法 (20)  
動詞について⑤  
／深谷耕治…………… 7
- ・ 伝道と翻訳 一受容と変容の“はざま”で一(4)  
翻訳とは③  
／成田道広…………… 8
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (10)  
ライシテの歴史⑦  
／藤原理人…………… 9
- ・ 地域福祉を拓く 一新たな寄付文化の創造  
一 (28)  
CSRと寄付①  
／渡辺一城…………… 10
- ・ 遺跡からのメッセージ (22)  
イスラエルの遺跡調査⑧ テル・ゼロール  
発掘 50周年とその記憶  
／桑原久男…………… 11
- ・ ヴァチカン便り (25)  
ヴァチカン内部の対立  
／山口英雄…………… 12
- ・ 平成 28 年度公開教学講座要旨：現代の事  
情に対する天理教の思案 (5)  
情報化社会 一技術革新がもたらす社会生  
活の変化一  
／森 洋明…………… 13
- ・ English Summary…………… 14
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 15  
「教学と現代」報告 (金子昭)／平成 29  
年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### 「神が抱きしめ…」

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

先月、昵懇にさせていただき教会長が亡  
くなられた。私は葬儀の斎主を務めさせて  
もらい、慌ただしい日が続いたが、少し落  
ち着いて物事を考えられるようになったの  
で気持ちを整理しながらこの巻頭言を書い  
ている。氏は年輩だが元気な方であった。  
昨年の暮れ、少しく体調の変化を感じ受診  
したところ、「余命わずか」という医師の  
診断が告げられた。思いもしない突然の宣  
告に、本人はもとよりご家族も、その事実  
を受け入れることは容易ではなかった。こ  
この次第を夫人から聞かされた私も、全く  
茫然自失の有様であった。

もちろん、私も教会長であるから親神  
にたすけを希うのは当然であるが、その  
一方で残された時間とどのように向かい  
合うのか、これがとても大切なことと感  
じた。『天理教教典』第七章「かしの  
・ かりもの」では、「古い着物を脱いで、新  
しい着物と着かえるようなもので、次に  
は、又、我の理と教えられる心一つに、  
新しい身上を借りて、この世に帰つて来  
る。」と教えられる。かりものである以  
上、いずれはお返ししなければならぬ  
が、「できるなら少しずつ、ゆっくりとそ  
のお働きをお返しさせてはもらえませ  
んか……」と願う日が続いた。信者の皆  
さんには、「心を込めてたすかりを願って  
下さい」と申し上げた。それは祈りを通  
して、会長がこれまで歩んでこられた信  
仰の人生と一体化することができるはず  
と考えたからである。各人がそれぞれの  
信仰の歩みを確かめる、それが氏にと  
っては何よりも生きる力になると考えた  
からである。氏は大勢の信者の皆さん  
のおたすけを受けられ、失われ行く意  
識の中で、「かしの・かりもの理が分か  
ったことが何よりも嬉しい」と話して  
下さった。誰もがその言葉に涙を禁じ  
得なかった。

身上出直しの消息について、

このものを四ねんいせんにむかいと  
り神がだきしめこれがしよこや (三号 109)  
しんぢつにはやくかやすもよふたて  
神のせきこみこれがたい一 (三号 110)  
と教えていただく。すなわち、人間の側  
からは、「身上を返す」ことであるが、親  
神は「神が迎え取り、その魂を抱きしめ、  
またこの世に返す」と言われる。どこま  
でも親神の計らいで迎え取られるのであ  
り、その魂は暫し親神の懐に抱かれる。  
親神礼拝の目標が、「ぢば、かんろだい」  
であるなら、その魂はあらゆる時空を  
超えてぢばに帰り、「今生はご苦労様で  
した」と親神の元にあるのだろう。そし  
てまた、親神の計らいによってこの世に  
返えされる。それはあたかも親鳥が雛鳥  
の誕生を待ちわび、自らの温みで、その  
誕生を促すようなものかも知れない。禪  
の公案に「啐啄同時」があるが、まさ  
にそうして生まれかわってくるのだら  
う。ここにこの世における無限の生を  
認めることができる。何と有難いことか。

私は悲しみに身が張り裂けそうで、「し  
ずめ詞」も「告別詞」も涙を堪えるこ  
とができず満足に奏上することもでき  
なかったが、信者の皆さんの祈りは、氏  
の出直しを尊厳に満ちたものとして下  
された。後日、学生時代からの愛読書  
であったV・E・フランクルの『それでも  
人生にイエスと言う』(春秋社)を読み直  
した。ご存知のようにフランクルは戦時  
の収容所体験という極限状況のなか、「ど  
こまでも人生を肯定する」というロゴ・  
セラピーを生み出しているが、「たしかに  
苦悩しなければならないけれども、とに  
かく人間にふさわしく意味のある苦悩が  
課せられている状態をどれほど切望した  
ことでしょうか」(72頁)と述べている。  
悲しく辛いできごとであったが、人間  
の尊厳の中に意味あることとして受け  
止めていきたいと思っている。